

# 情報活用宣言づくりにおける学習者の学びの様相

藤田 隆 滉\*・大島 崇 行\*\*・阿部 雅 也\*\*\*

(令和6年1月19日受付；令和6年4月19日受理)

## 要 旨

本研究は、学習者が主体的に情報活用宣言を作成する授業の実践における学習者の学びの様相を分析することを目的とし、小学校5年生を対象の授業実践をした。分析1より、学習者が作成した宣言を分析した結果、学習者は、《使用抑制》の内容と《積極的活用》の内容の宣言を作成した。また、それらは学校の約束に対応するものだけではなく、対応しないものも作成された。分析2より、班での話し合いを分析した結果、《使用抑制》の宣言作成過程において、自分自身が体験したことや自分の生活の中で視聴した情報などを織り交ぜ、自分たちの考えによる宣言を作成していた。一方、《積極的活用》の宣言作成過程においては、自分たちの経験を背景にした話し合いはされなかった。分析3より、学習者の振り返りを分析した結果、学習者は本授業が、新たな知識・気づきを得たり、これまでの使い方を見直す機会になったりし、これからの使用についての見通しを立てるものとなったと振り返るなど、学習者は自分たちで宣言を作る本授業を肯定的に捉えていた。以上より、学習者は、自分たちの生活文脈を背景に今の自分たちにとって大切だと思う内容の宣言を自分たちで考え作成しているとともに、情報活用宣言を作成する本授業実践を肯定的に捉えていたことが明らかになった。

## KEY WORDS

情報活用宣言 情報モラル デジタルシティズンシップ

## 1 問題の所在

GIGAスクール構想により1人1台端末の学習環境が整い、学校現場でのICT機器の活用が進んでいる。その一方、情報に関する様々なトラブルが学校内外問わず生じており（総務省、2020）<sup>1)</sup>、トラブルの対応として情報モラル教育やルールの重要性が叫ばれている。

情報モラル教育の実践はGIGAスクール構想以前のインターネットが普及された1990年代半ばから後半に行われ始めており、例えば、高校教員である高橋（1995）<sup>2)</sup>は、「ネチケットホームページ」を立ち上げ、ネットワーク使用のエチケット・マナーの向上を呼びかけている。また、高等学校学習指導要領情報の解説（2000）<sup>3)</sup>で、情報モラルが「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」と定義され、この定義はそれ以降も使い続けられている。

これらを始めとして情報モラル教育の実践は脈々と積み重ねられてきているが、芳賀（2020）<sup>4)</sup>は、小中学校での情報モラル教育が生徒指導的な面が強くなり、情報に関する危険などを提示することで、使用を抑制するものとなっていることを指摘する。また、玉田（2015）<sup>5)</sup>は、情報モラルの指導法が、「葛藤場面を設け、心情に訴えかけて、よくない行為を思いとどまらせる心情重視型」や、「ルールを覚え込ませるルール重視型」の指導法であり、禁止事項を強調することで情報活用にネガティブな印象を与えてしまうことを危惧する。情報を主体的に活用するのは児童・生徒であることを考えると、教師等の外部から抑制する視点ではなく、児童・生徒の内面からの強化により自らの責任ある行動規範を持つことが必要であろう。また、この1人1台端末の学習環境における学校教育を禁止や抑制しながら限定的使用に留めず、デジタルシティズンシップにあるように、デジタルを活用し社会参画する市民の育成の視点に立てば、児童・生徒が情報活用にポジティブなイメージをもち、積極的に活用していこうという態度を持てるようにしていく（坂本、2022）<sup>6)</sup> 必要があるのではないだろうか。

1人1台端末学習環境により、学校現場においては、児童生徒の情報機器の取り扱いについてのルールの策定が積極的に行われるようになってきている。そのルール策定の主体を見ると、各市町村レベル（例えば、徳島市教育委員会、2021）<sup>7)</sup> となっている事例や各学校レベル（例えば、品川区立戸越台中学校、2021）<sup>8)</sup> となっている事例があり、更に市町村のルールを受けてそれを自校化する形も見られる。また、ルールの対象を児童生徒とするものだけではなく

\*浜松市立蒲小学校 \*\*学校教育学系 \*\*\*上越教育大学学校教員養成・研修高度化センター

く、保護者を対象とする事例も報告されており（山本・清水，2018）<sup>9)</sup>、保護者を巻き込んでルールを守った運用が目指されている。このように各教育行政機関、各学校は危機感を抱きルールの策定を足速に行ってきている。一方、先に示した情報モラルでの課題のように、ルールが外部から抑制する形になることで児童・生徒の内面からの主体的な強化という視点が残されてしまう恐れがある。

学習者の内面を強化する視点から考えた際、学習者自らがルールを策定することが考えられる。学習者がルールを策定する実践研究として今村（2018）<sup>10)</sup>があるが、その実践ではぶらんこ遊びについて児童らが自分たちのルールを策定することを通して、ルールを守ることの大切さに気付く。情報活用についても学習者によるルール作りの実践が行われており、例えば、自分たちの学級の情報活用宣言を作成する活動が、複数校のホームページで報告されている（例えば、成田市立遠山小学校<sup>11)</sup>、高岡市立伏木小学校<sup>12)</sup>など）。しかしながら、これらで公表されている内容は、情報活用宣言づくりを行ったということ、そして、作られた情報活用宣言が示されているのみである。そこではそれらの宣言づくりの過程において、学習者がどのような意識を持ち、どのような話し合いがなされて作られたものなのか、そして学習者がその宣言づくりにより何を学んだのかなど、情報活用宣言を作成する過程における学習者の学びの様相については検討、報告されていない。デジタルシティズンシップの考えのもと、今後ますます学習者がICTを活用し、社会に参画していくことが求められていく中、学習者が主体的に情報活用宣言を作成する授業の実践における学習者の学びの様相について検討することは喫緊の課題である。

## 2 研究の目的

学習者が主体的に情報活用宣言を作成する授業の実践における学習者の学びの様相を分析する。

## 3 研究の方法

### 3. 1 調査対象

A県公立B小学校5年生30名

調査対象校では、GIGAスクール構想により配付された端末としてiPadを採用しており、学習者の1人1台端末の環境が整備されている。担任は、積極的に授業で活用したいという意味をもち、実践を重ねている。その中心は、インターネット検索が中心である。次に示す学校の約束に準じ、基本的には授業中に教師に指示された場面でのみの活用であり、使用方法も学習内容について調べ学習をすることが中心である。授業以外での使用は基本的には認められていないが例外として、係活動での使用が認められている。使用する係は主にイラスト係がイラストを描くための参考として画像検索をするものである。学習者は操作に徐々に慣れてきている一方、ルールを守らない等のトラブルが少しずつ起き始めてきており、担任もその対応をしたいと考えている。

### 3. 2 調査対象学校の情報モラルについて

児童に周知されているタブレット使用の約束は、学校での約束と家での約束の2つに分けられており、学校での約束として「①タブレットは学習の道具です。学習のため、みんなのためになることにだけ使います。」「②休み時間は、先生の許可なく使用してはいけません。」「③持ったまま走りません。地面に置いたり、出しっぱなしにしたりしません。」のルールが作られている。家での約束として「①使ってよい時間は、よる9:00までです。（夜9:00～朝7:00は使えない設定になっています。）」「②授業で活用したことのあるアプリ、先生から許可をもらったアプリのみ使用できます。」と示されている。

これらのように、学校側から学習者に対し、タブレット使用の方法や時間などを抑制する約束が設定されている。

### 3. 3 調査期間

2022年11月

### 3. 4 調査授業

・授業：特別活動「情報活用宣言を作ろう」

・ねらい：学校生活や私生活における情報等の取り扱いについての宣言作りを児童が主体的に行う活動を通して、情報等の取り扱いに対する意識を高く持つこと、宣言に対して責任を持つことの大切さを理解させる。本時は、学習班ごとに活用宣言案を学級全体で共有し、全員での話し合いで情報活用宣言を作成する。授業の展開を表1に表す。

## ・授業者

授業は、T1として次年度からの公立学校への採用が決まっている教職大学院生が行った。対象校には3ヶ月間の実習に入っており、対象学級を定期的に支援し学習者との関係は良好である。授業全般の運営指導を行った。T2は学級担任である。基本的には全体観察をし、必要な場合は生徒指導等の補助に入る。

表1 学習の展開

時間	内容	
8	目標共有	・本時の目標「タブレットやスマートフォン、インターネットなどの使い方について考えてクラスのみんなで学級の情報活用宣言を作ろう」を学級で共有する。 ・1時間の活動内容、方法を確認する。
14	班活動	学級を6班に分け、班ごとに「情報活用宣言」を作成する。内容は4つ以内。
23	全体共有	全体で班ごとに作成した「情報活用宣言」を共有し、学級全体の「情報活用宣言」にまとめる。

## 3. 5 授業記録

- ・学習者1人1台のICレコーダーを配付し、音声を録音し、班活動の会話を逐語録化する。
- ・学級全体の様子を教室の対角線上に設置した2台のデジタルビデオカメラで録画する。

## 3. 6 分析方法

## ①分析1：情報活用宣言

学習者たちがどのような情報活用宣言を作ったのか、各班が作成した情報活用宣言をKJ法（川喜田，1967）<sup>13)</sup>を用いて分類し、その内容を検討する。

## ②分析2：班活動での発話記録

分析1により、特徴的な宣言づくりをした班を抽出し、その班での話し合いの発話記録を質的に分析する。

## ③分析3：振り返り

授業の振り返り「今日の授業の感想を書いてください。」（自由記述）についての記述を分析する。本研究では、自由記述のうち、意味のまとまりを持つ1文もしくは複数の文を1命題とし、それらをKJ法（川喜田，1967）<sup>14)</sup>を用いて分類する。分類した内容を検討する。

## 4 結果と考察

## 4. 1 分析1 情報活用宣言

各班には、作成する情報活用宣言は宣言を4つ以内にすることを約束とした。各班が作った宣言は、1班4つ、2班4つ、3班4つ、4班3つ、5班3つ、6班2つであった。それら各班の宣言を小カテゴリーとし、それらについてKJ法を援用して中カテゴリー、大カテゴリーに分類した結果が表2である。

小カテゴリー「あやしいサイトに入りません」「変なサイトを開きません」は、検索の危険性を考え、それを抑制しているため、中カテゴリー【危険な検索をしない】とした。小カテゴリー「自分の個人情報をお教えしません」「人や住所がわかるような写真をのせません」「見せたくない物（人）をスタンプやステッカーでかくします」「本名をバラしません（個人情報も）」は、ネット上に個人情報を発信することの危険性を考え、それを抑制しているため、中カテゴリー【個人情報を発信しない】とした。小カテゴリー「人が傷つく言葉は発信しません」は、ネット上で行われるいじめ等の人権侵害行為を考え、他者への誹謗中傷を抑制しているため、【誹謗中傷発信をしない】とした。小カテゴリー「iPadの使用時間を決めるようにします」「時間を決めてインターネットを使用します」「決められた時間で使います」は、iPadやインターネットの長時間使用による悪影響を考え、使用時間の制限をするものであるため、中カテゴリーを【制限時間を決めた使用】とした。小カテゴリー「学習に関係ないことを検索しません」「係でも必要以上に検索しません（保存しすぎない）」「関係ないことは調べません」「必要ないことはしません」「家でのルールと学校でのルールを両方守ります」「iPadを決められたルールに従って使います」は、学習に関係ない使用はせずルールを守った使用をすることを考えているため、中カテゴリー【ルールの遵守】とした。小カテゴリー「その情報が正しいのか確かめて使います」は、情報の信憑性を吟味した上で有効に活用することの大切さを考えているため、中カテゴリー【情報の吟味と活用】とした。小カテゴリー「規則を守りながらも情報を得られるようにiPadをフル活用する」「みんなが安全に楽しくiPadを使おう」は、規則や安全性を大切にしながら積極的にiPadを活用していこう

表2 各班が作成した情報活用宣言

大カテゴリー	中カテゴリー	各班の宣言（小カテゴリー）	班
使用抑制	危険な検索をしない	あやしいサイトに入りません	1
		変なサイトを開きません	4
	個人情報を発信しない	自分の個人情報を教えません	2
		人や住所がわかるような写真をのせません	2
		見せたくない物（人）をスタンプやステッカーでかくします	2
		本名をバラしません（個人情報も）	4
	誹謗中傷発信をしない	人が傷つく言葉は発信しません	5
	制限時間を決めた使用	iPadの使用時間を決めるようにします	1
		時間を決めてインターネットを使用します	3
		決められた時間で使います	4
	ルールの遵守	学習に関係ないことを検索しません	1
		係でも必要以上に検索しません（保存しすぎない）	1
		関係ないことは調べません	5
		必要ないことはしません	3
		家でのルールと学校でのルールを両方守ります	3
		iPadを決められたルールに従って使います	5
積極的活用	情報の吟味と活用	その情報が正しいのか確かめて使います	3
	規則安全を守りながら積極的な活用	規則を守りながらも情報を得られるようにiPadをフル活用する	6
		個人情報のあつかいや安全に気をつけながら楽しくiPadを使おう	6

ということ意識から、中カテゴリー【規則安全を守りながら積極的な活用】とした。

これら中カテゴリー【危険な検索をしない】【個人情報を発信しない】【誹謗中傷発信をしない】のように、学習者は、インターネットの危険性について考え、危険な使用をしないよう自分たちでインターネットの使用を抑制していこうという思いが表れている。また、【制限時間を決めた使用】【ルールの遵守】のように、やりたい放題ではなく、学習のための端末使用を念頭におき、自分たちで制限時間などルールを遵守していこうという思いが表れている。一方、これらの宣言からは、安全な使用のため、ルールやモラルを守ろうという学習者の主体的な意思が表れている一方で、芳賀（2020）の指摘するように、その内容が使用の抑制へと向かっていることが分かる。そのため、これら中カテゴリーをまとめ、大カテゴリー《使用抑制》とした。16個の《使用抑制》の宣言に対し、3個と少ないながらも、積極的にiPadやインターネットを活用していこうという宣言も作られた。それら宣言の中カテゴリー【情報の吟味と活用】【規則安全を守りながら積極的な活用】をまとめ、大カテゴリー《積極的活用》とした。

ところで、先に示したように、iPad使用についての学校が示す約束が、「①タブレットは学習の道具です。学習のため、みんなのためになることにだけ使います。」「②休み時間は、先生の許可なく使用してはいけません。」「③持ったまま走りません。地面に置いたり、出しっぱなしにしたりしません。」であり、学校が示す家での約束が「①使ってよい時間は、よる9:00までです。（夜9:00～朝7:00は使えない設定になっています。）」「②授業で活用したことのあるアプリ、先生から許可をもらったアプリのみ使用できます。」であり、それらはどれも抑制的な内容となっている。これらの学校・家での約束と大カテゴリー《使用抑制》と並べると、中カテゴリー【制限時間を決めた使用】【ルールの遵守】が対応する。一方、中カテゴリー【危険な検索をしない】【個人情報を発信しない】【誹謗中傷発信をしない】は対応しないものである。

「学校による約束」については日常的な指導の中で学習者に浸透していき、それが作成する宣言に繋がっていくことが考えられる。一方、「学校による約束」とは対応しない内容の宣言や《積極的活用》の宣言は、どのような考えにより作成されたのだろうか。分析2では、これら宣言を作成するにあたり、学習者がどのような話し合いをしていたのか、班活動での話し合いの逐語録を分析する。

#### 4. 2 分析2 発話記録の分析

班活動の話し合いのうち、大カテゴリー《使用抑制》の宣言作成の話し合いと大カテゴリー《積極的活用》の宣言作成の話し合いについて分析する。さらに、《使用抑制》については、「学校の約束に対応する宣言」と「学校の約束に対応しない宣言」に分けて分析する。抽出する発話を、そのカテゴリーに属す宣言を多く出している班を典型と捉え、「(1)《使用抑制》-学校の約束対応の宣言作成」を1班から、「(2)《使用抑制》-学校の約束非対応の宣言作



成」を2班から、「(3)《積極的活用》の宣言作成」を6班から抽出する。

### (1)「《使用抑制》—学校の約束対応の宣言作成」における発話分析(1班)

1班は、作成した4つの宣言の全てが《使用抑制》の宣言であり、そのうち3つが学校の約束に対応した宣言の内容となっていた。表3は、その中の「係でも必要以上に検索しません(保存しすぎない)」を作成する際の会話である。

表3 自分達の経験(学級の係活動)をもとに議論する場面(1班)

A: ①学習に関係ないものに調べない。まあでも係とかの場合は除くけど。  
 B: ②でも、係だからってさあ、イラスト係だからってイラストめっちゃ調べて。  
 A: ちゃんと整理はしないとね。  
 B: ③何百枚もダウンロードして。  
 A: ④そう、別にとってもいいんだけど、貯めすぎ。貯めても意味ないじゃん。だって、もう描いたやつとか、もう描かないのは意味ないじゃん。……でも、⑤宣言に書くの係は除いた方がいいかな。  
 B: ⑥でも係だとしても調べすぎない。  
 C: ⑦関係ないことをダウンロードしないとか。  
 D: ⑧検索したりしないとか。

Aは、下線①より、「やっぱ学習に関係ないものに調べない。まあでも係とかの場合は除くけど。」と学校の約束である「タブレットは学習の道具です。学習のため、みんなのためになることにだけ使います。」に沿った発言をする。それを受けBが、下線②③より、「イラスト係だからってイラストめっちゃ調べて。」「何百枚もダウンロードして。」とイラスト系の活動について問題点を指摘する。Aは、その発言に重ね、下線④より、「別にとってもいいんだけど、貯めすぎ。貯めても意味ないじゃん。だって、もう書いたやつとか、もう書かない意味ないじゃん。」とイラストを描くための画像をダウンロードしフォルダに貯め込み過ぎても使わないと意味がなく、係であろうと使用目的が正当である必要があると主張する。一方で、下線①での意見同様、係は仕方がないかなと、下線⑤より、「宣言に書くの係は除いた方がいいかな。」と改めて提案する。それに対し、Bは、下線⑥より、係であってもなんでも自由に使用するのは制限すべきだと主張し、それに同意したC・Dは、下線⑦⑧より、係であっても関係ないダウンロードや検索をしないと宣言に書くことを意見する。

このように、1班は、学校の約束に対応した宣言を作成しているが、それをそのままぞっているのではなく、自分たちの学級での活用の様子を具体的に挙げ、それをもとに議論しながら「係でも必要以上に検索しません(保存しすぎない)」という宣言を作成していた。

### (2)「《使用抑制》—学校の約束非対応の宣言作成」における発話分析(2班)

2班は、作成した3つの宣言の全てが《使用抑制》の【個人情報発信しない】の宣言であった。表4は、その中の「見せたくない物(人)をスタンプやステッカーでかくします」を作成する際の会話である。

表4 自分達の経験(情報番組視聴)をもとに議論する場面(2班)

H: 個人情報を流失しない。  
 G: 他の人が、例えば個人情報がわかるような、写真とかアップするじゃん。それで、それを拡散したら、広まっちゃうじゃない。  
 (中略)  
 E: ①あと、母さんが知らないのにインスタに自分の顔を載せたり。  
 H: ②あー、親とかも。  
 F: ③写真撮るとさ、なんか目に。  
 H: そうそうなんかねさ、④ZIP(注:朝の情報番組)で見た。  
 G: ⑤ああ黒塗りのやつでしょ。  
 E: ⑥アップするとき、なんか周りそう、ZIPでやった。  
 G: ⑦てか、まず自分の顔。まず、自分の顔をネットに載せなければいい。

2班は、ネット上に個人情報を載せることの問題点について話している。その中で、Eが、下線①より、「母さんが知らないのにインスタに自分の顔を載せたり」と、親が本人に許可を取らずに子供の顔写真をSNSに載せることの

問題点を指摘する。それに対し、下線②より、Hは「親とかも」と、大人も個人情報の扱いをできていない人がいると同意する。そこに、Fが、下線③より、「写真撮るさ、なんか目に」と、SNS上に写真をアップロードする際に、目をスタンプで隠すことを話す。それにHが、下線④より、そのような対応について朝の情報番組でやっていたと反応する。そして、G・Eも、下線⑤⑥より、黒塗りにしたり、見せたくない周りの物を隠したりすることを朝の情報番組で見たと反応していく。そして、最後に、下線⑦より、Gが、「てか、まず自分の顔。まず、自分の顔をネットに載せなければいい。」と個人情報に当たるものをインターネットに載せるべきではないと主張した。

このように、2班では、Eの提案に対し、F・G・Hも朝の情報番組で見た試聴体験や既存の知識などを加えながら話のやり取りを進め、写真をアップロードする際に、個人情報など見せたくないものを晒さないような対応が必要であることを話し合っていた。Hが大人が自分の子供の人権を守れず個人情報を流出させていることを指摘するのに加え、Gがそもそもインターネット上に自分の顔という個人情報を載せるべきではないと主張しているように、2班の学習者は、個人情報について自分自身のモラルをもち、価値判断基準を設けていることが分かる。

### (3) 「《積極的活用》の宣言作成」における発話分析(6班)

6班は、作成した2つの宣言とも《積極的活用》の宣言であった。表5は、その中の「規則を守りながらも情報を得られるようにiPadをフル活用する」を作成する際の会話である。

表5 自分達の経験(情報番組視聴)をもとに議論する場面(6班)

I : ①えっと、偽のニュースに気を付けています、私は。そのために複数の情報を集めています。  
 J : なるほど。  
 I : あと、使いすぎないことです。  
 K : 俺と同じこと言ってんの。俺も考えていたんだよ。  
 J : iPadとかでもさニュースとか見れるじゃん。だから、そのニュースとかに騙されないように使う。  
 L : わし? 2つあって、②複数の情報を読んでいる。使いすぎない。あと、決められたルールはしっかり守ってます。例えば、なんだろうな。  
 K : 設定を開いちゃダメ。  
 L : そうそうそうそう、③設定を開いちゃダメとか、あの9時半まで使っていいよとか、それ過ぎたら使っちゃダメだよって制限などがあったりするよ。メディアの時間をしっかり守りなさいって言われて。  
 K : ④なんか確かに(自分も親に)守りなさいとは言われた。(自分の家でも)ルール決まってはいるってはいけど曖昧な。  
 L : で、⑤もう1個ね。その情報の安全性の確認。そうそうこういうやつ。本当にこの情報が合っているのかってやつ。  
 K : 同じじゃね。これと(ホワイトボードに書かれた、Iの意見を指さす)。  
 L : そうそう。  
 J : ⑥ルールを守って使う。不要なことは調べない。あとは勝手に使わない。  
 K : あ、でも確かに使う人いるもんね。  
 L : まとめられますかね。  
 K : ⑦規則を守りながらも、情報を得るようにiPadをフル活用する。

6班は一人ひとりが順番に自分の意見を発表し、それをホワイトボードに書き、最後にホワイトボードに書かれたものをまとめると言う形で話し合いを進めていた。まず、下線①より、Iが、偽のニュースがあること、そしてその対応策として行っている複数の情報を入手することを話す。次に、Lも、下線②より、自分が行っている、複数の情報を読んでいること、使いすぎないこと、決められたルールを守っていることを話し、下線③より、それは親から言われて、家庭のルールとして行っていることを伝える。それにKが反応し、下線④より、自分の家でも親からルールを守るよう言われてはいるが曖昧なところがあると、自分の家庭での様子について話す。続いて、下線⑤より、Lが意見を加え、さらに、下線⑥より、Jが意見を言う。全員の意見が出されたところで、下線⑦より、Kが全体の意見をまとめ、「規則を守りながらも、情報を得るようにiPadをフル活用する。」という宣言の形にする。

これまで6班の学習者は、誤った情報から回避するための複数の情報参照とルールを守ることについて自分たちの経験をもとに話し合っている。その根底には、インターネットや端末の危険性や身体への悪影響の問題があり、それを憂慮していることがある。そのため、対応策としての案を自分たちの経験を交えながら意見を出し合っていた。一方、作成された宣言にある「フル活用する」という言葉は、全体をまとめる過程でK自身が思いついたフレーズである。そしてその「フル活用する」と言うことについて議論されることなく宣言を構成する言葉として採用されていった。

6班のもう一つの宣言「個人情報のあつかいや安全に気をつけながら楽しくiPadを使おう」も同じような話し合いの形で、楽しく使っていくことの必要性や良さなどについて経験をもとに話し合う場面は見られなかった。また、「その情報が正しいのか確かめて使います」と《積極的活用》を出した3班も同様にそれぞれが出した意見の中にあったものをまとめたものであった。

#### (4) 発話分析のまとめ

分析2では、(1)《使用抑制》-学校の約束対応の宣言作成、(2)《使用抑制》-学校の約束非対応の宣言作成、(3)《積極的活用》の宣言作成の話し合いを分析した。どの分析対象の話し合いも、学習者の具体的経験をもとに話し合いがなされていた。外的に刷り込まれてきた知識から、自分たちの使用を抑制する宣言を作成するのではなく、自分自身が体験したことや自分の生活の中で視聴した情報などを織り交ぜ、自分たちの考えによる宣言を作成していた。一方、《積極的活用》の宣言の作成過程においては、積極的に活用することについての具体的経験は語られることはなかった。《使用抑制》については、日常の中で学校内・家庭内で経験することが多い。一方、《積極的活用》については、本学級においては、授業では教師が許可による使用、アプリの限定、使用方法も調べ学習中心など、その使用は限定的である。そのため、学習者の判断により端末を活用して主体的に発信したりするなどの活用経験は少ない。それ故、《使用抑制》の宣言作成過程とは違い、これまでの経験を背景として《積極的活用》の宣言を作成するという話し合いの流れにはならなかったと考えられる。

### 4. 3 分析3 発話記録の分析

授業の振り返りを1命題毎に分け、それらをKJ法を用い分類した結果が、表6である。学習者の振り返りは49命題に分けられ、それらは7つのカテゴリーに分類された。

表6 振り返り記述

カテゴリー	命題例	命題数
自分の思い・考えのまとめ	・ iPadは便利だけど使い方を間違えただけでウイルスが感染したり、怪しいサイトに飛んでしまったりするから怖いと思った。 ・ 情報やインターネットを使うときは、時間を決めて守っていくことが大切だと思いました。	4
他の人・他の班の意見の良さ	・ 2班の見られたくない物や人、家などをステッカーやシールで貼るがとていいなと思いました。そうすれば住所も特定されないのでもいいと思いました。 ・ 他の班が言っていた変なサイトに入らないというのがいい意見だと思った。なぜならコンピュータウイルスに感染したら取り返しのつかないことになるからです。	5
新たな知識・気付きを得た	・ この話し合いでタブレット、スマホ、インターネットはとても便利なのですが、その分危険なものもたくさんあると分かりました。自分はこのタブレットスマホインターネットは便利、楽しいこのことばかり考えていました。ですが、ただ自分の思っていることばかりではありませんでした。 ・ 今日の授業で、iPadの大切さや使い方がわかりました。	4
自分の使い方を見直す機会	・ これまでは大して決めずに個人情報を出さないようにしているからひとまずいいかなと思って使っていたので、時間をあまり意識できていなかったことに気がつきました。また、これまでは意識がかなり低く、無意識になっていたことが分かりました。 ・ たまにはこんな授業も必要だなと思った。この授業を生かしてiPadの使い方をみんなで見直して楽しんで使いたいです。	8
これからの使い方の見通し	・ メディア時間はこれからもしっかり守ろうと思います。時間制限を今度つけてもらおうとこの学習で思いました。 ・ クラスで決めた目標を守っていこうと思いました。iPadの件で、怪しいサイトや危ないサイトは開かないようにしようと思いました。	11
授業が楽しかった・充実していた	・ 今日この時間がすごく楽しかったし、勉強になりました。また授業をしてほしいです。 ・ この授業をしてよかったと思いました。理由は、色々ルールを決めて改めて守ろうと思うようになったのでこの授業をしてよかったと思います。	10
上手く話し合えた・良い話し合いだった	・ そんな自分で意見を言わないけど、今日は良い意見を言えてよかったです。 ・ 友達の意見を聞いたりしながら自分が言った意見もわかりやすく言ったりして、協力してかけたので嬉しかったです。とってもいい宣言になったと思いました。	7



学習者は、学級の情報活用宣言の作成をすることにより、【自分の思い・考えのまとめ】が進んだ。授業の中で【他の人・他の班の意見の良さ】から学んだり、話し合いの中で【新たな知識・気づきを得た】りしたのだと考えられる。また、それらの話し合いを通し、これまでの【自分の使い方を見直す機会】になっていた。そして、これからこう使っていこう、こう気を付けようという【これからの使い方の見通し】を立てることができていた。分析1・分析2より、学習者の話し合いは自分たちの使用を抑制する内容の宣言を作るものが多かったのだが、学習者は自分たちを縛る嫌な授業ではなく、【授業が楽しかった・充実していた】と捉えている。使用を抑制する宣言の作成であったとしても、それは自分たちにとって大切だと思うことを主体的に考え、【上手く話し合えた・良い話し合いだった】と思える話し合いが行われていたことにより、自分たちが守ろうと思える宣言になっていたと考えられる。

学習者の振り返りには、「つまらない」、「嫌だった」などネガティブな内容は1つもなく、上述のように、本授業の情報活用宣言づくりをポジティブに捉える振り返りが全体的にされていた。

## 5 まとめと今後の課題

本研究では、学習者が主体的に情報活用宣言を作成する授業の実践における学習者の学びの様相を分析した。

分析1より、学習者が作成した宣言を分析した結果、学習者は、《使用抑制》の内容と《積極的活用》の内容の宣言を作成した。また、それらは学校の約束に対応するものだけではなく、対応しないものも作成された。

分析2より、班での話し合いを分析した結果、《使用抑制》の宣言作成過程において、自分自身が体験したことや自分の生活の中で視聴した情報などを織り交ぜ、自分たちの考えによる宣言を作成していた。一方、《積極的活用》の宣言作成過程においては、自分たちの経験を背景にした話し合いはされなかった。

分析3より、学習者の振り返りを分析した結果、学習者は本授業が、新たな知識・気づきを得たり、これまでの使い方を見直す機会になったりし、これからの使用についての見通しを立てるものとなったと振り返るなど、学習者は自分たちで宣言を作る本授業を肯定的に捉えていた。学習者が作成した情報活用宣言の多くは、制限時間を設けた使用をする、ルールを遵守するなど使用を抑制する内容のものであった。しかし、その作成過程においては、自分たちの学級での出来事や家庭で視聴したテレビの内容など自分の生活の体験をもとに話し合いが行われていた。豊福(2022)<sup>15)</sup>はデジタル・シティズンシップで教える知識スキルは、学習者の背景文脈に寄り添った学習者の実態・認識に即した形で学ばれる必要があるとするが、本授業の学習者は、まさに自分たちの生活文脈を背景に、今の自分たちにとって大切だと思う内容の宣言を自分たちで考え作成していたと考えられる。そして、その内容が自分たちの端末使用を抑制するものであったとしても自分たちが守りたいと納得する内容を作成できたのだということが、本授業を肯定的に捉える振り返りからも支持することができる。

一方、積極的活用の内容の宣言も作成されていたが、それは班の意見をまとめる過程で司会役の学習者が思いつきでまとめたものであり、班メンバーの体験による自分たちの生活文脈を背景に作られたものではなかった。これは、学習者の生活において主体的に端末を活用していくという経験がまだ乏しいことが原因と考えられる。仮に、学習者端末を活用した授業実践が進み、学習者が端末使用の裁量権を持ち情報発信をするなどの学習経験が重ねられると、それらの経験に基づいた《積極的活用》内容の宣言が作成されるのではないだろうか。今後は、より学習者に裁量権がある授業実践が積み重ねられた学級において、どのような情報活用宣言が作成されるか、そして、その学びの様相がどうあるかを検討していく必要がある。

## 引用及び参考文献

- 1)総務省：「インターネットトラブル事例集（2020年版）」，2020，  
[https://www.soumu.go.jp/use\\_the\\_internet\\_wisely/trouble/](https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/)，（最終閲覧 2023/10/28）
- 2)高橋邦夫（1995）：ネチケットホームページ，1995，<https://www.cgh.ed.jp/netiquette/>（最終閲覧 2024/1/17）
- 3)文部科学省，「高等学校学習指導要領解説（情報編）」，2000．
- 4)芳賀高洋：情報モラルからデジタル・シティズンシップへ，坂本句・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真：「デジタル・シティズンシップ コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び」，大月書店，40-83，2020．
- 5)玉田和恵：各学校段階での情報モラル指導力を育成するための教員研修方法の開発，江戸川大学紀要，25，265-272，2015．
- 6)坂本句：デジタル・シティズンシップ教育の実践，坂本句・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真：「デジタル・シティズンシップ+ やってみよう！創ろう！善きデジタル市民への学び」，大月書店，16-26，2022．
- 7)徳島市教育委員会：「タブレット端末利用のルール」，2021，



- [https://www.city.tokushima.tokushima.jp/shisei/shiyakusho/ka\\_ichiran/kyoiku/index.html](https://www.city.tokushima.tokushima.jp/shisei/shiyakusho/ka_ichiran/kyoiku/index.html), (最終閲覧 2023/10/28)
- 8)品川区立戸越台中学校ホームページ：<https://school.cts.ne.jp/togosi-j/index.html>, (最終閲覧 2022/10/20)
- 9)山本朋弘・清水康敬：情報モラル指導における家庭と小学校の連携促進に関する検討，教育工学会論文誌，32，181-188，2008.
- 10)今村信哉：主体的に生きる子供を育てる小学校における主権者教育—小学校道徳科「ぶらんこ復活」の実践を通して—，共栄大学研究論集，16，179-193，2018.
- 11)成田市立遠山小学校ホームページ：<https://www.edu.city.narita.chiba.jp/es-tohyama/>，(最終閲覧 2022/10/20)
- 12)高岡市立伏木小学校ホームページ：<http://fushiki-e.el.tym.ed.jp/>，(最終閲覧 2022/10/20)
- 13)川喜田二郎：「発想法」，73-77，中公新書，1967.
- 14)同掲書 (13)
- 15)豊福晋平：「デジタル・シティズンシップなんておおげさ？」，坂本旬・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真：「デジタル・シティズンシップ+ やってみよう！創ろう！善きデジタル市民への学び」，大月書店，27-38，2022.

# Aspects of discussions in making information utilization declarations

Takahiro FUJITA\* · Takayuki OSHIMA\*\* · Masaya ABE\*\*\*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to analyze aspects of learners' learning in a class practice in which learners proactively create their own declarations for the use of information equipment.

Analysis 1 shows that, the results of the analysis of the declarations made by the learners showed that they made declarations of the contents of "use restraint" and "active use" They also made declarations that not only corresponded to the promises of the school, but also to those that did not.

Analysis 2 shows that, as a result of analyzing the group discussions, the learners created their own declarations based on their own ideas by incorporating their own experiences and information they had watched in their own lives in the process of creating the declaration for "suppression of use. On the other hand, in the process of making the declaration of "active use," they did not discuss it based on their own experiences.

Analysis 3 shows that, based on the results of the analysis of the learners' reflections, the learners positively perceived this class, in which they created their own declarations, as they reflected that they gained new knowledge and awareness, had opportunities to review their past usage, and made prospects for their future use of the system.

In conclusion, it was clear that the learners thought and created their own declarations of what they thought was important for them in the context of their own lives, and that they positively evaluated the practice of this class in which they created their own declarations of information use.

---

\* Hamamatsu City Kaba Elementary School \*\* School Education

\*\*\* Joetsu University of Education Research Center for Advanced Professional Development in School Education